平成 20 年度　8020 公募研究報告書抄録

研究課題：８０２０と QOL・ADL に関するコホート研究

研究者名：高田豊[1)]、安細敏弘[2)]、邵仁浩[2)]、粟野秀慈[2)]、園木一男[1)]、濱嵜朋子[2)]、
鳥巣剛弘[1)]、鍵山俊太郎[1)]、吉田明弘[2)]、大住伴子[3)]、中道郁夫[1)]、豊島邦昭[4)]、
西原達次[5)]、竹原直道[2)]

所　　属：九州歯科大学総合[1)]内科学分野、[2)]保健医療フロンティア科学分野、
[3)]口腔応用薬理学分野、[4)]口腔組織機能解析学分野、[5)]感染分子生物学分野

本文：

＜目的＞我々のこれまでの研究成果から、８０歳高齢者では咀嚼機能と QOL、ADL、運動能力、死亡率に有意な関係が認められた。本申請研究では８０歳健診と８５歳健診をともに受けている 207 名を対象にして、①８０歳時の口腔所見、口腔機能が８５歳時の QOL と ADL の予見因子となるか？②８０歳から８５歳までの口腔所見・口腔機能の変化が８５歳時の QOL と ADL と関連があるか？③８０歳時の口腔所見、口腔機能が８０歳から８５歳までの QOL と ADL の変化と関連があるか？　以上の３点について調査結果を縦断的に解析する。

＜方法＞８０歳健診と８５歳健診をともに受けている 207 名を対象にして、①80 歳時口腔所見（現在歯数）、咀嚼機能（咀嚼可能食品数）と 85 歳時 QOL（SF-36）・85 歳時 ADL（老研式活動能力指標と厚労省「障害老人日常生活自立度」(寝たきり度)判定基準)、認知能(MMSE;Mini-Mental State Examination)の関係、②80 歳から 85 歳までの口腔所見、口腔機能の変化と QOL・ADL の変化の関係、③80 歳時の口腔所見と 80 歳から 85 歳までの QOL・ADL の変化の関係の３項目について相関関係を算出し、有意な関係があれば重回帰分析用いて関係の独立性を検定する。

＜結果＞　①80 歳時現在歯数、咀嚼可能食品数と 85 歳時 QOL、ADL、認知能の関係：80 歳時現在歯数と 85 歳時握力（ｒ＝0.207、P=0.005）、85 歳時ステップ数（ｒ＝0.171、P=0.033）に有意な正の相関を認めたが、80 歳時現在歯数と他の 85 歳時運動能力、他の 85 歳時 QOL、85 歳時 ADL との間には有意の関係を認めなかった。重回帰分析を用いて性差で補正すると 80 歳時現在歯数と 85 歳時握力、80 歳時現在歯数と 85 歳時ステップ数の関係は有意ではなくなった。80 歳時咀嚼可能食品数と 85 歳時 QOL の sf（ｒ＝0.169、P=0.022）、85 歳時認知能の MMSE 合計点（ｒ＝0.017、P=0.175）に有意な正の相関関係を認めたが、80 歳時咀嚼可能食品数と 85 歳時運動能力、80 歳時咀嚼可能食品数と 85 歳時の他の QOL、80 歳時咀嚼可能食品数と 85 歳時 ADL には有意の関係を認めなかった。重回帰分析で性差を補正しても、80 歳時咀嚼可能食品数と 85 歳時 QOL の sf（β＝0.186、P=0.013）、80 歳時咀嚼可能食品数と 85 歳時認知能の MMSE 合計点（β＝0.180、P=0.015）の間には有意の正の関係が認められた。　②80 歳から 85 歳までの口腔所見・口腔機能の変化と QOL・ADL の変化の関係：老研式 ADL の 80 歳時から 85 歳時への変化と現在歯数・咀嚼可能食品数の 80 歳時から 85 歳時への変化の相関関係を検討した。口腔所見や口腔機能の変化と ADL の変化には有意な関係がなかった。　③80 歳時の口腔所見・口腔機能と 80 歳から 85 歳までの QOL・ADL の変化：老研式 ADL の 80 歳時から 85 歳時への変化と 80 歳時の現在歯数・咀嚼可能食品数には有意の関係を認めなかった。

＜結語＞80 歳時の咀嚼機能が 85 歳時の一部の QOL（sf）と ADL の一部である認知能の独立した予見因子であることから、85 歳以後の QOL や認知能を良好に維持するためには、80 歳の後期高齢者においても咀嚼機能を良好に維持させる努力が重要であることが分かった。